

Chapter 16

Links and Boundaries: Reconsidering the Alpine Village as Ecosystem

Robert McC.Netting

P309

Para1 ・人類学の生態系に関する誤った考え

=ex.機能上の統合における過度の強調、安定、地域共同体や関連する不均衡な怠慢の中の規制機構、より包括的な政治・経済的システムから発生する変化、進化論による順応不良
=特に同じような環境を持つ共同体との比較時に、民族学的視点が欠けているとき顕著

Para2 ・生態人類学者の生態系：相互作用の小さな単位（社会の統一体：村、部族など）を焦点とする

・生物学者の生態系：池の水から生物圏全体にいたるまで、伸縮自在の概念
→系統立てた概念としての自然淘汰の考えというより、生態学的考えを強調する
→生物学者との協力の傾向あり

Para3 ・生物学的な正統性をもち、客観的な比較可能性の出現
（“文化”というよりは“集団”の選択に由来する調査の単位）

=架空のものでしかない
→生物社会的要素の堅固な情報なしには、説明のための概略のレベルを克服できないため

P310

Para1 ・Jochim(1981)：人間の生態系の境界の定義は、生物学のものよりさらに難しい

→原因：種々異なった相互作用があるため
・著者：Jochim(1981)は地理的領域の中で所有する資源を存続する、独立した集団を混乱させる
→どういう地方システムなのか(ex.従順さ、効果)を見出す過程で、隠された相互依存を発見
→①弱点のあるシステムの支援、②危険な不均衡の改正

Self-Sufficiency and the Market

Para2 ・フィールド調査(1924)：Valais州のVisp盆地にあるTörbelという共同体

・調査地域：1545ha(畑、牧草地、放牧場：967ha、森林：455ha、非生産的土地：123ha)
・土地利用：ぶどう園、干草の牧草地、穀物畑、放牧地、製粉工場、農場など（標高差に応じて変化）
→15世紀以来、食料・衣類などの供給は地域の環境を劣化させるようには見えなかった
→地域を特徴付ける生態系は、自然環境の相互依存や生活の糧の手法、集団の面での自立を縮図的に示しているように見える

P311

Para1 ・Törbelの住民・生態学者：両者ともに小作農の過去を強調

→原因：他のヨーロッパの田舎の社会から比較的独立しており、自給自足状態→著名な共同体
→実際は...

①古代の小道の一部が存在

→災害が起こったときに、高山の交通は閉鎖的通路であるため有用

②貿易（塩・金属）

→塩：チーズの保存、牛の飼育に不可欠 →年に一度フランス・イタリアの貿易商から購入
金属：斧やのこぎりなど、農業従事に必要不可欠 →必要に応じて輸入

Para2 ③農業関連の輸出

→飼育した乳牛、屠殺した牛、ヤギ、羊、毛糸、チーズなど

④労働力の輸出

→季節労働(家畜追い、ラバ追い、見張り番)、傭兵など

→③④は現金収入を得られる（但し、③<④）

→外部で得た賃金は、そのほとんどが村の家族に送られる

→税金、日用品・製品化された道具の購入、土地の販売などに使用される

→生活の継続のために、世界的機能のヨーロッパにいる資本家との積極的な接触が必要

Para3 ・食料の自給自足：外部との農業資源の接触によって、援助・減少がある

→ex.①ジャガイモの採用(19世紀後半～)：山間部での農業は、これによって生産力が上がる

②イタリアからのとうもろこし粉の購入：これによってライ麦への依存が減少

P312

Para1 ・調査で明らかになったこと

＝村の財産のモデルが、閉鎖的システムの中で農業の資源の相続を当てにしていること

→村の富の領域は上下しやすく、相当な流動性がある

→財産相続は流動性の影響が少なく、外部からの現金稼ぎで得られたお金は農業へ投資される

・厳しい労働

→小作人一家のような土地を持たない人物でも、栄えることを認められた

Population Growth and Self-Regulation

Para2 ・生態人類学者

＝人口が規制される中での、仮説立てした人間の生態系の魅力に抵抗することは難しいと認識

→背景

①環境容量の下で集団を維持する簡単なモデルの批判

②地方の資源の安定を維持するために数を調整する“群淘汰”の理論構築の疑問視

→疑問の解決：分析のためのより広範囲にわたる、複合的で部分的な計量的データの必要性

→注意点：地方の集団の変動は決して集団を取り巻く孤立の中では理解されない

Para3 ・Törbelの人口統計学的独自性

＝①法的政治的障壁の負担によるものというよりは、地形上の障壁によるもの

②Törbelの家系は、時を越えて著しい連続性を示す(cf.多くのヨーロッパの都市)

- =1700~1970年まで、新しい姓が定着していない
- 村の市民権は男性の血統に下っていく
- 部外者が農地や高山の放牧地を使用することは不可能

- Para4** ・村の範囲：他の管理の中にある人の動きの普及
- 山の集団が重大な模範のタイプに従うことは可能
 - それは出生率によって引き起こされる流れによるもの
 - ・Törbelの労働力の輸出
- =土地を持たない労働者階級の創造を避けるためのひとつの手段

P313

- Para1** ・独立した生態系の貧弱な類似点
- =方法：917の結婚の分析(データ：1703年~)
 - 高い族内結婚の割合は、遺伝子を孤立させる状況を作り出していない
 - 他の村の人との結婚の社会・経済的強制は、地域の集団のなかへ、異なった遺伝子の原料の流れを妨げない

The Ghost of Environmental Determinism Past: Comparing Alpine Ecosystem

- Para2** ・自然環境は定数化してとどめておくことが可能
- =より包括的な生態学的システムの中での社会的組織構造機能の模範的取り付けの魅力の一つ
 - ・人類学者の一部
- =暗黙のうちに、進んだ村での研究を地方全体の代表例として評価する
- 他の村に足を踏み入れることなく、結論付けをすることもある

- Para3** ・比較：生態系の機能のいくつかの地方モデルの暗黙の過度の一般化に関する是正手段
- =同じような環境で、時を越えて、空間的に別個の集団を調査すること
 - 差異を測定し、分析するためには、歴史的人口統計学や政治的経済の手法を用いる
 - ・Pier Paolo Viazzo(1989)が上述の方法を応用
- =対象：イタリアの共同体である Alagna
- =Törbelと生息地、物質文化、法的伝統、言語、民族性を共有する
- 結果：多くの点で著しく異なる

①人の移動

→Alagnaは歴史的に大きな数の移動が示される(ex.労働力の輸出(左官)、輸入(鋤夫))

→背景：国際的経済条件、国内の貿易、移民政策への従属

P314

- Para1** ②家族の制限
- 意識的な人口の抑制
 - 婚姻年齢を上げ、独身生活が長くなるシステムは、人口成長におけるきわめて重大な定常性の構造として行われているように見えるが、婚姻率のレベルは地域的、時間的に変わりうる

→他の要素も同様

- ・安定した生態系の中の環境的・人口統計学的要素の接近した機能の統合を強調する要素
- ＝非常に厳格で、最終的な分析に欠点が多い

Para2 ・ Valaisan の型と北イタリアの複雑で多種多様な大家族との比較

→一家の大きさの型はずっといくつかの適応力のある変化を見せるが、

フランスの Savoy の家族（早い結婚、低い多産）と同様に、

Alagna の直系家族は出稼ぎの若い男性の不在によく適している

- ・直系家族普及の類似点

→Peter Laslett(1984)：地中海型(広範囲にわたり、古い家族組織の歴史を持つ)

→背景：政治的要素

＝直系家族組織や分割できない相続財産の維持に好都合

→一家の財産を相続するものとそうでないものの不平等が発生

→はっきりした階級制(ex.オーストリア)(cf. Törbel：比較的平等主義)

Para3 ・ Törbel における経済的自給自足、絶対主権の程度などの特徴から、北スイスの共同体を特徴づけることはできない

→ex.歴史的平等主義的地方政府システム

＝すべての市民に共有地の権利を与えた閉鎖的共同体

→高山の社会組織すべてに一定ではなかった

- ・歴史と環境は規範正しさや因果関係を示す

→決して統一されたり、必要とされたりするものではなかった

Tiling the Environment/Population

P315

Para1 ・ 地域と国家の経済・政治的配置の種類

＝地域の高山の生産と社会組織に影響を与えるもの

→歴史的に生存しうる生態系の多様性が存在するかもしれない

- ・安定性のあるいくつかの測定は、集団の異なったレベルへ到達させる可能性がある

Para2 ・ Valais におけるすべての高山牧草地の管理に関する調査

＝①Törbel は過剰なたくわえを防ぐために牛の数を減らすべき

②一連の改良は作られたものであるという指摘

→スイスの高山経済協会の検査官は、Törbel のようなところに投資するのに気が進まない？

Para3 ・ 共同の土地における林業営林の目標である自然科学の判断に達することは難しい

→市場の材木への上昇する需要は、山岳部の重大な森林破壊をもたらす

→にもかかわらず、Törbel は一世紀以上の間、家屋を建築するのにほとんど外部から購入した木材を使用した

- ・資源利用の過去の形を復興するのは難しい

→バランスのよい現在の外観は、オーバークースや環境の荒廃の歴史的挿話を隠す可能性がある

Cultural Conception, Folk Model, and System

P316

- Paral** ・集団の生態的關係を十分に概念化するために、
まるで機能上統合した維持する定常性の分離できる生態系の一部であったように、
それを扱う必要があるも知れない
- Greertz(1963)が生態系という生物学者の述語について説得力のある推薦をして以来、
生態人類学者は独特の積極性と不正確さとともに使用してきた
＝生態系